１　はじめに

**「もぎさい」法教育教材・教員用説明資料（中学校）**

本教材は、主に、一コマ（５０分間）の授業で、生徒が動画を視聴することによって刑事裁判手続を模擬的に体験し、証拠に基づいて被告人が有罪であるかどうかについて考えることができるように作成したものです。

社会科（公民的分野）において司法に関する学習をするに当たり、中学生が理解することができるよう、使用する専門用語は発達段階に応じた適切なものに限定しつつ、平易な言葉を用いた説明を加えるなどしています【[[1]](#footnote-1)】。

また、初めて模擬裁判を行う高校生を対象とする授業で使用していただくこともできる内容となっています。

２　本教材の位置付けと学習効果

　⑴　本教材の対象とする教科

　　　中学校社会科（公民的分野）

　⑵　本教材の位置付け

　　　枠内･･･中学校学習指導要領（平成２９年告示）社会より抜粋

　　　「」･･･中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説社会編より抜粋

　　　波線･･･直接的に関連する記述

　　①公民的分野の目標との関連

|  |
| --- |
| 現代社会の見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。  ⑴　個人の尊厳と人権の尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務との関係を広い視野から正しく認識し、民主主義、民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動との関わり、現代の社会生活及び国際関係などについて、個人と社会との関わりを中心に理解を深めるとともに、諸資料から現代の社会的事象に関する情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。  ⑵　社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を現代の社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察したり、現代社会に見られる課題について公正に判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。 |
| ⑶　現代の社会的事象について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される、国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことの大切さについての自覚 |
| などを深める。 |

　　②公民的分野の内容及び内容の取扱いとの関連

|  |
| --- |
| （内容）  ⑵　民主政治と政治参加  対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配、民主主義などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。  ア　次のような知識を身に付けること。  （中略）  (ｳ)　国民の権利を守り、社会の秩序を維持するために、法に基づく公正な裁判の保障があることについて理解すること。 |

|  |
| --- |
| （内容の取扱い）  ⑷　内容のＣについては、次のとおり取り扱うものとする。  ア　⑵のアの(ｳ)の「法に基づく公正な裁判の保障」に関連させて、裁判員制度についても触れること |

「アの（ウ）の国民の権利を守り、社会の秩序を維持するために、法に基づく公正な裁判の保障があることについて理解することについては、法に基づく公正な裁判によって国民の権利が守られ、社会の秩序が維持されていること、そのため、司法権の独立と法による裁判が憲法で保障されていることについて理解できるようにすることを意味している。その際、抽象的な理解にならないように裁判官、検察官、弁護士などの具体的な働きを通して理解できるようにするなどの工夫が大切である。また、「裁判員制度についても触れ」（内容の取扱い）ながら国民の司法参加の意義について考察できるようにし、国民が刑事裁判に参加することによって、裁判の内容に国民の視点、感覚が反映されることになり、司法に対する国民の理解が深まり、その信頼が高まることを期待して裁判員制度が導入されたことについて理解できるようにすることが大切である。」

|  |
| --- |
| （内容の取扱い）  ⑴オ　分野の内容に関係する専門家や関係諸機関などと円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識した課題を追究したり解決したりする活動を充実させること。 |

③内容の取扱いについての配慮事項との関連

|  |
| --- |
| ２⑴　社会的な見方・考え方を働かせることをより一層重視する観点に立って、社会的事象の意味や意義、事象の特色や事象間の関連、社会に見られる課題などについて、考察したことや選択・判断したことを論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習を一層重視すること。 |

「・・・社会科においては、これまでも様々な資料を適切に収集し、活用して事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに、適切に表現する能力と態度を育てることを各分野共通の目標としてきた。・・・資料等を有効に活用して論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの社会科ならではの言語活動に関わる学習を一層重視する必要がある。

⑶　本教材の学習効果

　　　本教材を活用することにより、学習指導要領等の記載に関連して、以下のような学習効果があると考えられます。

○　刑事裁判手続を模擬的に体験することを通じて、裁判員制度を含めた司法制度の意義、とりわけ刑罰を科す刑事裁判手続において厳格なルールが定められていることの意義についての理解を深めるとともに、裁判員制度に対する関心を高める。

○　証拠から認められる事実について、検察官及び弁護人・被告人のそれぞれ異なる立場からの評価を踏まえ、被告人が有罪であるかどうかを検討することにより、物事を多面的・多角的に考察して分析する力や結論を導いた理由を説得的に表現する力を養う。

３　本教材の構成及び本教材を活用した授業例

本教材（視聴覚教材）は、①刑事手続の流れ、刑事裁判のルールの説明、②題材の強盗致傷被告事件の審理（題材の事案の内容は後記４⑴参照）、③検討のポイントの説明、④専門家（裁判官、検察官、弁護士）のメッセージで構成しています。

①で授業の導入として刑事裁判のルール等を学習し、②で刑事裁判手続の流れに沿って事案や証拠等を把握し、③で事案のポイントをつかみ、これを踏まえて生徒らが付属のワークシートを用いて被告人が有罪であるかどうかについて検討して話合いなどを行うことを想定しています（検討のポイントとワークシートの内容は後記５、６のとおりです。）。

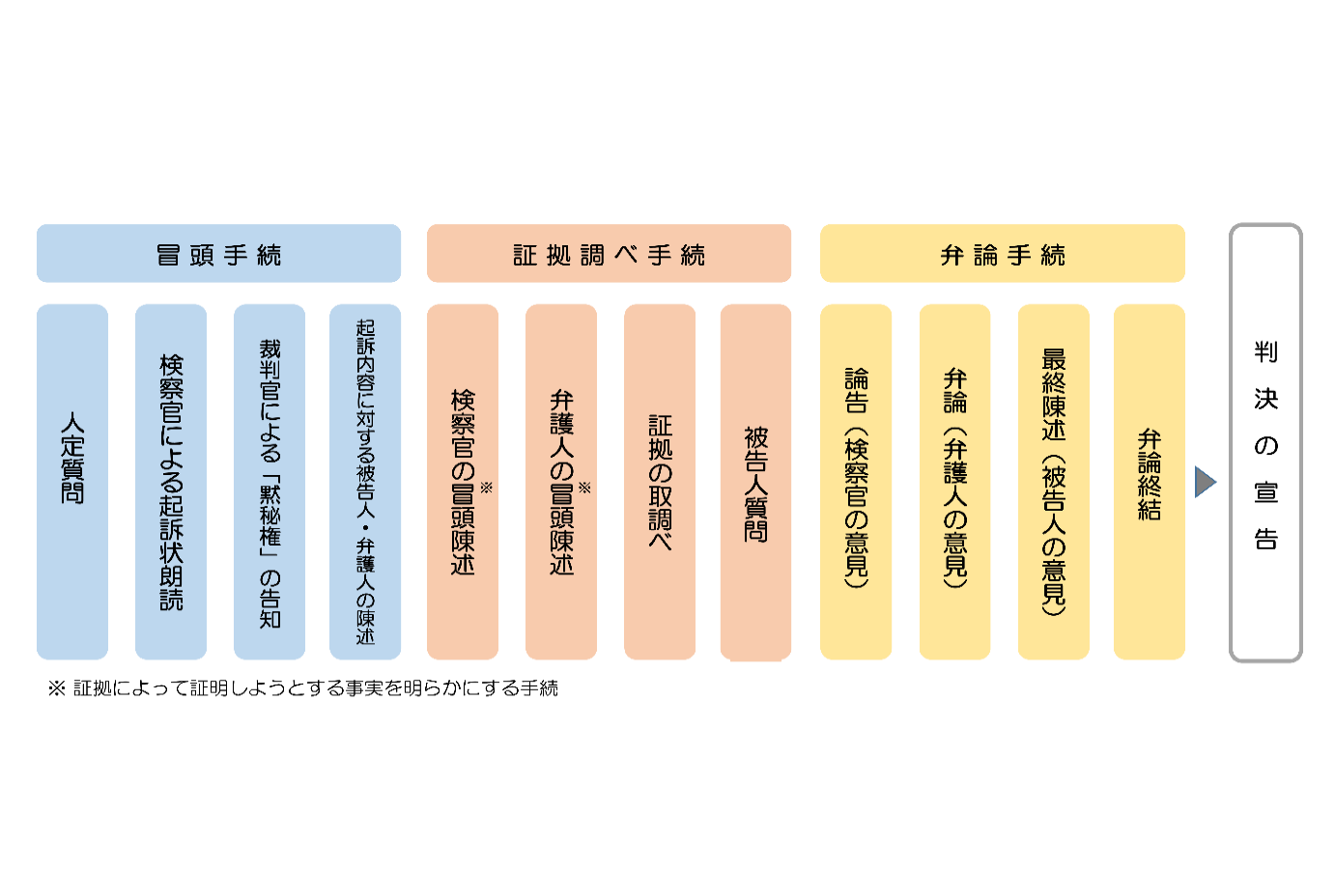
④の専門家のメッセージは、司法や法曹への関心・理解を深めていただける内容となっており、授業の最後などに視聴いただくことを想定しているものです。

動画は複数のチャプターに分割されていますので、一コマ（５０分）の授業で、話合いの時間等を十分確保したい場合などは、動画の全てを使用せず、一部のチャプターのみを使用して行うことも考えられます（動画の再生速度を適宜調整することも考えられます。）。また、授業の目的に応じて、一部のチャプターのみを使用することも考えられます。

一コマ（５０分）の授業で、動画を使用した授業例は、**別添の「学習指導案（視聴覚教材）」**を参考にしてください。

４　視聴覚教材の内容の説明【[[2]](#footnote-2)】

⑴　題材の強盗致傷被告事件の内容

○　刑事裁判手続の流れ

　　○　事案の概要

・被告人が、道路上を歩いていた被害者に対し、被害者が肩に掛けていたショルダーバッグを引っ張って転倒させるなどの暴行を加え、現金（千円札５枚）入りの茶封筒が入ったショルダーバッグを奪い取り、被害者に傷害を負わせたとして起訴された強盗致傷の事案であり、被告人は「自分は犯人ではない」と主張しています。

・検察官は、証拠として、①診断書（被害者のけがについて）、②被害者の供述調書（犯人にショルダーバッグを奪われた状況や犯人の服装について）、③報告書（被告人が発見された当時の被告人の写真）、④報告書（事件の約１５分後、公園で被告人が発見され、被告人が所持していた茶封筒に入っていた千円札５枚中の１枚から被害者の指紋が検出されたことなど）、⑤報告書（事件現場付近の地図）を提出しています。

・被告人は、眠れなかったので近所の公園をぶらぶらしていただけであり、現金入り茶封筒は何かあったときのために家から持ってきたものと供述しています。

・検察官は、論告において、①被告人は、犯行直後の時間帯に犯行現場の近くで、被害品と同じ茶封筒に金種と額が一致した千円札５枚を持っており、しかも千円札１枚には被害者の指紋が付いていたことから、被告人が持っていた茶封筒に入った現金は被害品であるといえること、②犯人の服装と被告人の服装の特徴が一致していること、③被告人は、茶封筒に入った千円札５枚のうち１枚に被害者の指紋が付いていた理由を説明できていないことから、被告人は犯人であると主張しています。

・弁護人は、弁論において、①被告人は、自宅から現金入り茶封筒を持って出たと説明していること、②茶封筒や千円札の全部に被害者の指紋が付いていたわけではなく、現金は色々な人が触るものであること、③被告人の服装は珍しいものではなく、犯人の服装と特徴が偶然一致していただけであることから、検察官は被告人が犯人であることを証明できていないと主張しています。

　⑵　刑事裁判のルール

【無罪推定の原則（疑わしきは罰せず）】

「犯罪を行えば、刑罰を科せられる」というルールは、犯罪を防止し、私たちが自由に安心して暮らせる社会を実現するために重要な役割を果しています。一方で、刑罰は人の生命、自由、財産を強制的に奪うものであるため、無実の人を誤って処罰することがないよう、刑罰を科すには慎重に慎重を重ねなければなりません。

そのため、刑事裁判では、検察官が証拠に基づいて犯罪の証明をする責任を負います。そして、被告人が間違いなく有罪であることを示すだけの証拠がない場合には有罪と判断することはできません（無罪と判断しなければならない）。これを「無罪推定の原則（疑わしきは罰せず）」といいます。

【証拠裁判主義】

刑事裁判では、誤った判断をしないためにも、何に基づいて判断したのかを明らかにするとともに、当事者である被告人に十分な反論の機会を与える必要があります。

そのため、刑事裁判では、「事実の認定は、裁判で提出された証拠だけでしなければならない」というルールがあります。例えば、その事件に関する報道やＳＮＳに投稿された書き込みなどに基づいて判断することは許されません。これを「証拠裁判主義」といいます。

⑶　刑事手続の流れ

犯罪が発生すると、警察等の捜査機関が捜査（犯人を捜したり、証拠を集めたりする）を行い、検察官に事件を送ります（送致）。検察官は、事件について更に必要な捜査（被疑者や関係者から話を聞く、必要な証拠を集めるなど）を行い、本当に被疑者が犯人かどうか、刑罰を科す必要があるかなどについて検討し、被疑者がその事件の犯人であることに間違いがなく、また、刑罰を科す必要があると判断したとき、その事件を起訴します【[[3]](#footnote-3)】。

起訴されると、裁判所は、裁判を開いて、提出された証拠に基づいて、被告人が有罪であるかどうか、有罪である場合にはどのような刑を科すかを判断して判決をします。また、起訴された事件の中で、刑罰が重い一定の犯罪については、国民が裁判員として裁判官と一緒に判断する裁判員裁判が開かれることになります。裁判員裁判の対象事件の例として、殺人罪や強盗致傷罪などがあります。

５　検討のポイント

被告人が犯人といえるどうかを考える上で、まず、被告人が持っていた茶封筒に入った現金が被害品といえるかどうかがポイントになります。①被害品と同じ茶封筒に入っていたこと、②現金の額、種類が一致していたこと、③千円札１枚に被害者の指紋が付いていたことについて、被告人の供述や弁護人の主張も踏まえ、このような偶然が重なることがあり得るかどうかといった観点から評価して検討することになります。

また、被告人の服装と犯人の服装の特徴が一致していたことについて、弁護人の主張も踏まえながら、上記のポイントと併せて検討することになります。

さらに、茶封筒に入った現金は家から持ってきたとの被告人の供述が信用できるかどうかについて、被告人が持っていた千円札１枚に被害者の指紋が付いていたことを踏まえ、検討する必要があります。

なお、本教材の事案の結論については、有罪、無罪どちらが正解ということはなく、刑事裁判のルールに従って、自分なりに事実を評価して結論を導くことができるかどうかが重要です。

事実の評価の例は次のとおりです（あくまで一例であり、これ以外の意見が不正解であることを示すものではありません。）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 結論 | 犯人だと確信が持てる | 犯人だと確信が持てない |
| 理由 | ・茶封筒、金額やお金の種類の一致だけでなく、千円札１枚に被害者の指紋が付いていたという偶然が重なる可能性はとても低いはず。  ・事件から間もない時間帯に、被告人が事件現場の近くにいたことも考えると、被告人が持っていた茶封筒に入った現金は被害品で間違いない。  ・被告人と犯人の服装の特徴が一致していたことも考えると、被告人が犯人で間違いない。  ・被告人は家から持ってきたと言っているが、上記のような偶然が重なるとは考えられず、信用できない。 | ・お金の種類は、千円札の１種類だけであり、偶然一致することはあり得る。  ・お金は人から人へ渡るものなので、偶然千円札１枚に被害者の指紋が付いていることはあり得るし、被告人がその理由を説明できないことも不自然ではない。  ・被告人の服装は、黒色Ｔシャツ、青色ジーパンであり、特徴的なものではないから、犯人の服装と特徴が一致したことは、被告人が犯人であるとする根拠としては弱い。  ・被告人は、現金入り茶封筒は何かあったときのために家から持ってきたものと言っており、特に不自然ではない。 |
| 生徒の  意見  （※） | ・深夜であり、人があまり出歩かない時間帯に、犯人以外で現金や服装の特徴がこれほど一致することは考えられない。 | ・被害者と被告人の家が近ければ、コンビニなどで買い物をしたときに被害者の指紋が付いた千円札を被告人が受け取っていてもおかしくない。 |

※視聴覚教材を使用した授業で、生徒から実際に出された他の意見

６　ワークシートの内容

添付のワークシートは３枚あり、必要に応じて変更して利用できます。

・ワークシート１

証拠から認められる事実をそれぞれどのように評価するかを整理するためのワークシートであり、生徒が「評価の理由」と「主張（評価）」を書き込むことを想定しています。

・ワークシート２

被告人が有罪か無罪か、及びその理由を記載するためのワークシートです。生徒が個人の考えを書き込んだ後、グループワークを実施してグループの意見を書き込み、最後に振り返りをすることを想定しています。

・ワークシート３

検察官と弁護人の主張のポイントを記載したもので、生徒が検討するための補助とするものです。

７　「シナリオ教材」について

「シナリオ教材」は、「視聴覚教材」の題材となっている事案の裁判シナリオです。

授業の時間を十分に確保できる場合などには、シナリオ教材を用いて、生徒をそれぞれ配役して裁判劇（ロールプレイ）を行い、刑事裁判手続を実際に体験してもらうことも考えられます（授業の導入では、「視聴覚教材」の刑事手続の流れや刑事裁判の重要なルールのチャプターまで視聴してもらうことも考えられます。）。

1. そのため、実際の裁判とは使用される用語や証拠等が異なるほか、手続の一部を省略しています。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 動画では説明を省略している部分もありますので、授業では必要に応じて補足説明することも考えられます。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 起訴するかどうかの判断は、検察官に委ねられています。検察官は、被疑者が犯人であることに確信が持てない場合や、被疑者の境遇、犯罪の軽重及び情状並びに犯罪後の情況等の諸般の事情を踏まえ、起訴する必要がないと判断したときは、事件を「不起訴」にします。 [↑](#footnote-ref-3)